鳥取県立図書館「ふるさと文学コーナー」開設記念展示

近代日本文学とともに歩んだ

鳥取の文学者たち

尾崎放哉
〈俳人〉

尾崎　翠
〈小説家〉

生田春月
〈詩人・翻訳家〉

田中寒樓
〈俳人〉

河本緑石
〈俳人〉

伊良子清白
〈詩人〉

生田長江
〈評論家・翻訳家〉

池田亀鑑
〈国文学者〉

阪本四方太
〈俳人・文章家〉

会場　鳥取県立図書館　2階　特別資料展示室

Ogiwara Seisensui × Osaki Housai

荻原井泉水と尾崎放哉

【参考】

『人間種田山頭火と尾崎放哉』

『郷土出身文学者シリーズ１　尾崎放哉』

放哉と荻原井泉水は、第一高等学校時代からの仲です。二人は一高俳句会に参加し、高浜虚子らの指導を受けながら交流を深めていきました。その後放哉は東京帝大法科、井泉水は文科に別れ一時疎遠になりますが、明治44年に井泉水が俳句誌『層雲』を創刊し、放哉はそこへ俳句の投稿を始めました。

やがて放哉はエリートとして期待されながらも、酒に溺れ転落・放浪の人生を歩んでいきますが、晩年の大正14年に井泉水の尽力により小豆島・南郷庵に入ります。放哉はそこで、亡くなるまでのわずか8か月の間に3000近くの句を残しました。井泉水は「（句の）質においては（小林）一茶以上」と高く評価しています。

放哉没後の大正15年、726句が収められた唯一の句集『大空』が、井泉水によって編纂されました。

尾崎放哉（おさきほうさい）

俳人　明治 18（1885）年～大正 15（1926）年

邑美郡吉方町（鳥取市吉方町）に生まれる。本名秀雄。自由律俳句の最も著名な俳人のひとり。

鳥取一中（現在の鳥取西高校）入学頃より句作を始め、校友会雑誌『鳥城』への投稿を行う。

第一高等学校、東京帝国大学とエリートコースを歩みながらも、大正 12 年（1923 年）からは仕事も家族も捨てて各地を転々とするが、小豆島の南郷庵で没する。

この間に発表された作品は多くの人の心をとらえ、熱烈なファンが多い。

◆代表作『放哉俳句集　大空(たいくう)』

◆代表句「咳をしても一人」「入れものがない両手で受ける」

【肖像写真】鳥取県立図書館蔵

荻原井泉水（おぎわらせいせんすい）

俳人　明治 17（1884）年～昭和 51（1976）年

東京市に生まれる。本名幾太郎のち藤吉(とうきち)。

東京帝国大学大学院を卒業。俳句界の新傾向運動の流れを受け、俳句革新の旗手になるべく明治 44 年（1911 年）に河東碧梧桐(かわひがしへきごとう)（1873 年～1937 年）と機関紙『層雲(そううん)』を創刊。西欧風理想主義や季題無用論などを唱え、自由律俳句を進めた。放哉を小豆島へ見送った後は、禅修行を通して東洋思想へと変化した。

著作は翻訳や句集などおよそ 300 冊に及ぶ。

◆代表作『層雲』『ゲーテ言行録』『自然の扉』

◆代表句「石のしたしさよしぐれけり」

【肖像出典】「原泉」荻原井泉水／著　【参考】『京都近代文学事典』

Hayashi Fumiko
×
Osaki Midori

林芙美子と尾崎翠

【参考】
『江古田文学 71号』
『郷土出身文学者シリーズ7 尾崎翠』

二人が出会ったのは昭和2年。翠が31歳で上京し『琉璃玉の耳輪』を発表するなど、独自の世界を切り開こうと執筆に専念していた時でした。

林芙美子は当時無名でしたが、7つ上の翠を姉のように慕い、喫茶店で小説のネタを考えたり、それぞれの文学人脈を紹介しあったりしたといいます。

翌年、翠は芙美子に誘われ『女人芸術』へ「アップルパイの午後」「『蒼馬を見たり』評」など作品の発表を始めました。『蒼馬を見たり』は芙美子の処女詩集ですが、出版費用が足りず困っていた芙美子に対し、鳥取出身の涌島義博（わくしまよしひろ）が経営する南宋書院に出版の仲介をしたという逸話があります。翠はこの評論で芙美子の作品について「まことの心臓は第二の心臓をうちます」と、やはり翠らしい独特の表現をしています。

尾崎　翠（おさき　みどり）

小説家　明治 29（1896）年～昭和 46（1971）年

岩井郡岩井宿（岩美町岩井）に生まれる。
大正 8 年（1919 年）日本女子大学国文科に入学し、デビュー作「無風帯から」を『新潮』に発表。大学を退学した後も創作活動に取り組み、『婦人公論』や『女人藝術』など、多くの雑誌に作品や映画評論が掲載された。また、大正 11 年（1922 年）に鳥取で結成された水脈社（すいみゃくしゃ）の同人となっている。

昭和 7 年（1932 年）に帰郷後は表立った活動を行わなかったが、独特の不思議な作風で関心を集め、近年再評価が進み多くの読者を魅了している。

◆代表作『第七官界彷徨』『こほろぎ嬢』『地下室アントンの一夜』『歩行』

【肖像写真】個人蔵

林　芙美子（はやし　ふみこ）

小説家　明治 36（1903）年～昭和 26（1951）年

山口県に生まれる（福岡県の説もある）。本名フミコ。

大正 5 年（1916 年）尾道に移り住み、尋常小学校・高等女学校で出会った教師たちの指導により文学への道を志す。大正 11 年（1922 年）に上京し、職を転々としながら執筆活動を行う日々が続いたが、1930 年（昭和 5 年）に発表された『放浪記』『続放浪記』がベストセラーになり、作家としての地位を確立した。

戦時中は従軍作家としてアジア各地で活躍。敗戦後も旺盛な創作ぶりを示した。

◆代表作『放浪記』『蒼馬を見たり』

【肖像出典】「Century books　人と作品 15 林芙美子」福田清人・遠藤充彦／編著　【参考】『京都近代文学事典』